

## 論文

# シラー賞とヴィルデンプルッフ

河合 まゆみ

### Abstract

Ernst von Wildenbruch ist der einzige Schriftsteller, der den preußischen Schiller-Preis zweimal erhielt. Dieser erste literarische Ehrenpreis Deutschlands wurde im Jahr 1859 anlässlich des hundertsten Geburtstags Friedrichs von Schiller gestiftet. In der Amtszeit Wilhelms I. genoss der Schiller-Preis, der mit 1000 Gold-Talern dotiert war, ein hohes Ansehen. Ernst von Wildenbruch wurde 1884 für sein Gesamtwerk mit dem Schiller-Preis ausgezeichnet. Nach seinem Regierungsantritt nahm jedoch Wilhelm II. so großen Einfluß auf die Preisvergabe, dass der Schiller-Preis rapide an Renommee verlor. 1896 schlug die Schillerkommission „Hanneles Himmelfahrt“ von Gerhart Hauptmann sowie „Heinrich und Heinrichs Geschlecht“ von Ernst von Wildenbruch für die Preisverleihung vor. Der Kaiser Wilhelm II. aber, der den Preis zum Kampfmittel gegen den Naturalismus machen wollte, lehnte die Würdigung Hauptmanns ab und entschied, einzig Ernst von Wildenbruch den Preis zu verleihen und zwar in doppelter Betragshöhe. Ernst von Wildenbruch übertrug dennoch daraufhin die Hälfte des Betrags, die eigentlich Gerhart Hauptmann zugestanden hätte, der Deutschen Schillerstiftung.

Schlüsselwort: Ernst von Wildenbruch

### はじめに

プロイセンのシラー賞は、ドイツで初めての文学賞であり、ヴィルデンプルッフは1884年と1896年にそれぞれ受賞している。シラー賞を二度受賞した作家はヴィルデンプルッフだけである。1890年代、ドイツ皇帝となったヴィルヘルム2世がシラー賞選考に恣意的に

干渉したため、二度目の受賞はヴィルデンプルッフを皇帝と自然主義との対立の矢面に立たせる結果となった。

以下では、まずシラー賞の歴史をたどった後、1880年代と1890年代のシラー賞選考の状況と、ヴィルデンプルッフ受賞の経緯を詳細に検討していく。

## I. シラー賞の歴史

まずシラー賞の歴史を簡単に振り返る。<sup>1)</sup>シラー賞は、1859年、シラーの生誕100周年を機に、プロイセン摂政ヴィルヘルム（後のドイツ皇帝ヴィルヘルム1世）によって創設された。ドイツ語で書かれた文学作品に対して国家が定常的に授与する文学賞としては最初のもので、「文学に対する国家の保護義務が初めて認識された」<sup>2)</sup>という点で画期的であった。シラー賞は、グリルパルツァー賞やバウエルンフェルト賞など後に続く文学賞のモデルともなった。<sup>3)</sup>Sowaはシラー賞を「政治的ジェスチャー」<sup>4)</sup>と見なし、制定の背景には当時のプロイセン王家の政治的打算が働いていたとする。シラー没後、彼への崇拜は次第に政治的色合いを帯び、自由主義的運動のシンボルとなっていく。そうした政治的なシラー崇拜の頂点が、1859年のシラー生誕100周年であった。ドイツ各地で多くの人々が記念祭に参加し、あたかも政治的な大衆運動の様相を呈した。<sup>5)</sup>1848年の三月革命で反動派の先頭に立ったヴィルヘルムにとって、シラー賞制定は、国民の信頼を回復し、王家の権威を堅固なものにする絶好の機会であった。

シラー賞は、3年ごとのシラーの誕生日に、期間中に発表された最も優れた劇作品に授与されるもので、1000ターラー（後には3400マルク）の賞金と黄金の記念メダル（100ターラー相当）が贈られた。その都度、大学教授や劇場監督などから成る9名の選考委員会が構成され、その中から選考委員会書記が選ばれた。委員会の最終決定は文部大臣を通して国王に提出され、承認を得るという形をとったが、これは、当時まだ一般的であった作家と諸侯とのパトロン関係の名残といえる。選考に関しては、規定上、「独自の着想と堅固な構成力によって、思考と形式において、永続的な価値を有する」<sup>6)</sup>作品のみ選ぶべき、また舞台での上演に特に適しながらも「現代の一時的な流行に追随することのない」<sup>7)</sup>作品を特に考慮すべきであるとされており、結果的に、正統派の悲劇、とりわけ歴史劇が好まれた。

このように、シラー賞は、規定上、単に優れた作品をではなく、最も優れた作品を選出しなければならないこと、最終的に国王の承認を必要とすることが、選考委員会には重い足かせとなった。ヴィルヘルムは在位中<sup>8)</sup>、選考委員会の決定をあえて侵害するようなことはしなかったが、それでも彼のもとでシラー賞が完全なかたちで授与されたのは、つまり賞金と黄金のメダルとともに授与されたのは、1863年のヘッベル（Friedrich Hebbel）の『ニーベル

ンゲン』 („Die Nibelungen“), 1866年のリントナー (Albert Lindner) の『ブルータスとコラティヌス』 („Brutus und Collatinus“), 1869年のガイベル (Emanuel Geibel) の『ゾフォニスベ』 („Sophonisbe“) の3回のみであった。初回の1860年に始まって、1872年、1875年、1881年、1887年と受賞作なしということもままあった。ちなみに該当作がない場合、次回に賞金を繰り越し、2作品の受賞も可能となった。ここからは、Sowaのいうように、選考委員会のあえて冒険を犯そうとしない、慎重な駆け引きの様子がうかがえる。<sup>9)</sup> いずれにせよ1980年代までシラー賞は文学界で高い名声を享受した。<sup>10)</sup>

しかしヴィルヘルム2世の即位で状況は大きく変わる。自らも芸術に通じ、王家の威信を高めるために芸術を利用しようとするヴィルヘルム2世は、シラー賞選考にも大いに干渉し、それがスキャンダルとなってシラー賞の評判を著しく損なった。ヴィルヘルム2世が選考委員会の決定に常に異議を唱えた様子を見ていく。まず即位直後の1890年、後述するように、混乱を極めた選考委員会は苦肉の策としてフォンターネ (Theodor Fontane) とマイヤー (C. F. Meyer) を提案したが、スイス人であるという理由でマイヤーを拒否し、ドイツ人作家を推薦するよう命じた。1893年、選考委員会は自然主義作家フルダ (Ludwig Fulda) の風刺的な童話劇『タリスマン』 („Talisman“) に決定したが、皇帝は31歳のフルダが受賞にはまだ若いという理由でこれを拒絶した。1896年の選考では、ハウプトマン (Gerhart Hauptmann) の『ハンネレの昇天』 („Hanneles Himmelfahrt“) を拒否し、もう一人の候補者であるヴィルデンブルッフの賞金を倍額にした。ここからわかるように、皇帝はシラー賞に関する留保権を、自ら「ドブ」 (Rinnstein) の文学と呼んで忌み嫌った<sup>11)</sup> 自然主義文学に対抗するため、ある種の検閲手段として用いたのであった。1899年、選考委員会のメンバーが大幅に入れ替えられたにもかかわらず、再びハウプトマンの童話劇『沈んだ鐘』 („Die versunkene Glocke“) が受賞作として提案され、文部大臣がこの提案を差し戻すという事態となった。これを受けて、1900年、選考委員会はシラー賞の規定の変更を提案し、結果、シラー賞の授与はそれまでの3年ごとから6年ごとになり、賞金も倍増となった。また、自然主義のような現代的な問題作を回避するため、過去12年間の作品が選考の対象となった。そして、選考委員会が複数の作品を推薦した場合、決定権は皇帝にあるとされた。このような変更にもかかわらず、1902年の選考では、選考委員会は受賞作を見い出せずに終わっている。ここに至って、シラー賞の権威が完全に失墜したといえる。

この事態を受けて、1904年、ゲーテ協会によって国民シラー賞が新たに制定される。変更前のシラー賞と同様、3年という期間を設定したが、シラー賞と同じ轍を踏まぬように、「最も優れた」ではなく、単に優れた作品に与えることとした。国民シラー賞は、本家のシラー賞を補うことが目的であったため、当然のことながら、1905年の第1回目の受賞者はハウプトマン以外には考えられなかった。国民シラー賞は、この後、1908年、1912年の3回

授与された。<sup>12)</sup>

シラー賞がプロイセン王家のもと、規定に則って授与されたのは1908年が最後である。選考委員会はシェーンヘア (Karl Schönherr) とハルト (Ernst Hardt) の作品を提案し、驚いたことに皇帝は反対の意を唱えなかった。第二次大戦後、シラー賞はプロイセン州政府によって一時的に復活したが、国家社会主義のもと消滅した。

## II. ヴィルデンプルッフの1884年の受賞をめぐる

ヴィルデンプルッフの作品が初めて選考委員会の議論に上ったのは、1881年の選考でのことである。アングロサクソン人の歴史を扱った悲劇『ハーロルト』 („Harold“) が最終会議まで残ったが、結果的に候補作とはならなかった。将来性は有望であるが、現在での受賞はまだ早いのではないかという結論であった。選考委員会の中の、とくにヴィルデンプルッフをよく知り、彼を高く評価するメンバーは、「この才能豊かな、まだ発展途上の若い作家に」<sup>13)</sup>、激励の意味で賞金だけでも与えてはどうかと提案したが、ほかのメンバーの同意を得られなかった。1881年のシラー賞は、結局、該当作なしとなった。Sowa は、『ハーロルト』が1884年にグリルパルツァー賞を受賞することから、この1881年の時点でシラー賞を与えても問題はなかったのではないかと述べている。<sup>14)</sup> そうした意見は、後から述べるのは容易だが、当時の選考を非難することはできない。ヴィルデンプルッフが世に認められるのは、1881年3月、マイニンガー劇団による『カロリング王朝人』 („Die Karolinger“) 公演をきっかけにしてである。『ハーロルト』は1875年の成立後、度々の書き換えにもかかわらず、1882年まで上演には至らなかった。ヴィルデンプルッフの戯曲を、舞台での演出を抜きにして、純粋に美学的視点から評価するなら、後述のフォンターネ批評のようになり手厳しいものとなる。選考委員会が授与を思いとどまった理由はそのあたりにあるといえる。

以下では、『ハーロルト』を分析し、作品に対する批評を考察する。この作品は5幕からなる悲劇で、イギリスの王座をめぐるアングロサクソン人の王ハーロルト (ハロルド2世) とノルマンディー公ヴィルヘルムとの戦いを描いた作品である。筋書きを簡単にたどると、まず第1幕、舞台はドーバー城で、イギリス王エドゥアルトが甥であるノルマンディー公ヴィルヘルムを伴って訪れる。ドーバー伯であるハーロルトは、ノルマンディー人をイギリスに入れたいという誓いを破ったとして、「ノルマンディー人の操り人形め」(29) と国王を罵倒する。国王は彼を追放し、その弟を人質にとる。第2幕、一旦はフランドルに逃げたハーロルトは、今やロンドンへと攻めあがってきている。優柔不断な国王は自分のなした処置を後悔する。城内に攻め入ってきたハーロルトは、国王を許し、和解した後、人質となった弟を取り戻しにヴィルヘルムのもとへ出立する。第3幕、ハーロルトはヴィルヘルムとも

和解し、その娘アデーレと愛し合うようになる。ヴィルヘルムは二人の結婚を許す条件として、国王が自分に約束した相続を認める誓いをハーロルトに立てさせる。しかしそれがイギリスの王位であること、自分が騙されたことを知ったハーロルトは、アデーレに別れを告げ、一人イギリスへ逃げ帰る。第4幕、ロンドンに戻ったハーロルトは国王から真実を聞かされる。ヴィルヘルムに王位を約束したことを国王は後悔する。ハーロルトは、ザクセン人の国をノルマンディー人に渡さないため、十字架にかけて誓った聖なる約束を破る決意をする。国王は貴族と民衆を招集し、後継者としてハーロルトに王冠を授ける。しかしハーロルトの母や一族は、アデーレを愛し、弟を連れ帰れなかったとしてハーロルトへの忠誠の誓いを拒絶する。教会の奸計でハーロルトが聖なる誓いを破ったことを聞き、民衆の心も彼から離れてしまう。ノルマンディー人がイギリスに上陸したと聞き、ハーロルトは死を承知でヘイスティングスの戦いに赴く。第5幕では、アデーレが戦場で戦い傷つくハーロルトの幻を見る。戦いが終わった戦場では、ハーロルトの母親が一度は見放した息子の遺体を探し回り、一方、ヴィルヘルムには娘アデーレの死の知らせが届くのだった。

主人公のハーロルトは、情熱的で、しかもナイーブな、愛国心あふれる若者で、ヴィルデンブルッフの作品に共通する英雄像である。この作品は「誓い」がテーマになっており、それを軸に話が展開していく。第1幕では、ノルマンディー人を入れないという誓いを破った国王をハーロルトが罵倒し、追放となる。第2幕では、アデーレ姫に心奪われ、ハーロルトはよく考えもせずヴィルヘルムに誓いを与えてしまう。最後は、祖国のために、ヴィルヘルムへの誓いを破ることをまた新たに誓う、といった具合である。

ヴィルデンブルッフは、『ハーロルト』の執筆にあたって、ラッペンベルク (J. M. Lappenberg) の『イギリスの歴史』 („Geschichte von England“) を歴史的資料として用いたが、その際、ノルマン人とアングロサクソン人との対立のなかで、ハーロルトの行為に民族性の発露を見いだそうとするラッペンベルクの解釈に大いに惹かれたようである。<sup>15)</sup> 作品化するにあたって、ヴィルデンブルッフは11世紀のイギリスの史実をかなり自由に改変しており、たとえば、悲劇を引き起こす直接の原因となるハーロルトとアデーレの恋物語は、ほとんどがヴィルデンブルッフの創作である。<sup>16)</sup> またヴィルデンブルッフはハイネ (Heinrich Heine) の『ヘイスティングスの戦場』 („Schlachtfeld bei Hastings“) からも詩的インスピレーションを得ており、とくに『ハーロルト』の最終幕にその影響がみられる。こうして作品の初稿が1875年に成立し、その後何度か手を入れられ、1882年3月に初演された。『ハーロルト』の公演がいかに熱狂的に受け入れられたかを Hanstein は以下のように述べている。

熱狂して喝采する大衆を前に批評家たちは途方に暮れて立ちつくしていた。それは現代的な人生から作り上げられた作品ではなかったが、そのようなもののどれよりも効果を

及ぼし、根源的な力で作用した。この突飛な性格描写、怒涛のごときオーバーアクション、響きわたる効果にかぶりを振るしかなかった — それらすべてが若者には正しかったのだ。彼らはそれほど長い間、大胆な筆致の絵を待ち焦がれていた、男らしい力強さを — そういったものすべてがここにはあふれかえっていた。<sup>17)</sup>

次に、当時を代表する劇評家であるフォンターネの批評を見ていく。『ハーロルト』のベルリンでの初演は、1882年4月21日、国立劇場においてであった。これが、フォンターネにとっての最初のヴィルデンプルッフ作品の批評の機会となった。彼は公演を観た夜の日記に、「ヴィルデンプルッフのハーロルトが上演され、大成功をおさめる。舞台効果に溢れ、才能豊かであるが、根は弱い、それどころか全く弱い」<sup>18)</sup>と記している。23日にフォス新聞に掲載された彼の批評はかなり手厳しい。観客の熱狂ぶりと自分の批評が対照的であることをことわったうえで、以下のような総評をまず述べている。

ヴィルデンプルッフの『ハーロルト』は、とてつもなく効果的な作品であるが、全くナイーブで全く無批判な観客をあてにしている。能力、知識、経験を十分に持つものは……この作品をよいということはできない。明晰でも正しくもない考え方から作り出されており、真理のためではなく、効果のために尽くしているという意味において、全く現代的な刻印が捺されている。<sup>19)</sup>

このあと登場人物に関して、「彼らは私にまったく信頼の念を抱かせない。……彼らは、私の意見では、やってはいけないし言うてはいけないことばかりをしたり、言ったりする」<sup>20)</sup>として、詳細な作品分析が続く。繰り返される誓いも無意味であるとする。作品には、「悲劇的な罪も、偶然や気分を超えた運命の支配も」<sup>21)</sup>なく、「登場人物たちの中に生じる本物の軋轢」<sup>22)</sup>であるべきものが、『ハーロルト』においては、せいぜい「子供じみた老国王の矛盾だらけの行動によって生じた混乱状態」<sup>23)</sup>にすぎないとしている。

1884年、前回とほとんど変わらないメンバーで構成されたシラー賞選考委員会は、ハイゼ (Paul Heyse) とヴィルデンプルッフの二人に、その業績全般に対して授与することを提案した。一作品にではなく全業績への授与は、本来規定に反するが、前例もあり、結果的に賞金のみの授与となった。選考委員会の報告を見ると、前回の選考対象となった『ハーロルト』は、規定により今回は受賞できないことを確認した上で、ヴィルデンプルッフの授賞理由を次のように説明している。

『ハーロルト』はそれ以後何度も上演され、非常に人気を博している。作者はその作品に幾重にも手を入れた。彼が新たに発表した作品『カロリング王朝人』、『父と息子』、『メノー派教徒』が『ハーロルト』に及ばないとしても、全業績は舞台で感謝と共感を受けるにふさわしい。作家は自分の流儀を完成しており、これまでの業績で十分に評価されてよい。<sup>24)</sup>

ほとんど同じメンバーから成る選考委員会が、3年前に受賞は早すぎると落選させたヴィルデンプルッフを、すでに完成した作家と評価しているのは、かなり無理があるように思われる。また、ほかの作品を過小評価してまで『ハーロルト』を前面に押し出しているのは、『ハーロルト』がグリルパルツァー賞を受賞したからであろうか。ただ、ここでも指摘されているように、『ハーロルト』は1881年のシラー賞落選後、大きく変更の手を入れられている。たとえば、前述のフォンターネでさえ称賛したハーロルトとアデーレの恋物語も、この時の修正によって格段によくなっている。<sup>25)</sup>

選考委員会報告によると、ヴィルデンプルッフがすでにグリルパルツァー賞を受賞していることから、「立て続けに賞を与えるのが作家にとってもふさわしいかどうか<sup>26)</sup>」という疑念が一人の委員から表明されたが、「しかしながらこの疑念は、彼の隣に第二の作家が並ぶやいなや、すぐなくなる。彼らのうちのどちらがより受けるに値するかは、ひとえに個人の趣味にゆだねられる<sup>27)</sup>」としている。これでは、Sowaがいうように、ヴィルデンプルッフの受賞への疑念を除くためにもう一人の候補者を立てたかのようにとれる。グリルパルツァー賞を受賞したヴィルデンプルッフにシラー賞も取らせたいという上からの指示をさえSowaは疑っている。<sup>28)</sup>グリルパルツァー賞受賞が追い風となったことは確かであろうが、むしろ1884年の報告書で注目すべきは、それまでの25年間のシラー賞授与を振り返って、「これまでの25年間でシラー賞を受賞した作品のうち、ただの一つとして、舞台上どころか、観客の記憶にすら残っていない<sup>29)</sup>」と述べたうえで、今回提案する二人の作家の舞台上での業績を強調していることである。たとえばヴィルデンプルッフに関しては、「力強い戯曲様式<sup>30)</sup>」を持ち、「シーンをエネルギーにまとめて押し出すことや、それぞれの状況を万全の効果で展開することができ、<sup>31)</sup>洗練された観客なら「よく観察すればもちろん非常に目に付くような性格描写の弱さも」<sup>32)</sup>見過ごさせてしまうような舞台上の高揚を指摘している。

この受賞は、ヴィルデンプルッフがマイニンガー劇団の『カロリング王朝人』公演をきっかけに一大ブレイクを果たしたことに起因すると思われる。1881年10月26日に『カロリング王朝人』がベルリンで初公演され、その効果たるや、目を見張るものがあった。それまでは上演を断られていた作品が次から次へと舞台にかかり人気を博す。1881年11月15日には『父と息子』(„Väter und Söhne“)がブレスラウで、11月29日には『メノー派教徒』(„Der

Menonit<sup>4)</sup> がフランクフルトで、1882年3月7日には『ハーロルト』がハノーファーで上演される。そしてついに、それまで門を閉ざしていたベルリンの王立劇場が、1882年4月22日に『ハーロルト』を上演する。そのわずか4日後、『カロリング王朝人』がウィーンのブルク劇場で上演されるといった具合である。ヴィルデンプルッフはドイツ語圏の主だった劇場すべてを制覇したわけである。<sup>33)</sup> 当時の熱狂ぶりを Litzmann は次のように語っている。

それらは、勝利の四声ファンファーレのように、新しい時代、新しい男の到来を告げていた。それまでほとんど無名だった男の四つの戯曲がわずか数か月の間にドイツの舞台を征服し、演劇史において元来まれな強さとか結束についての、喜ばしい驚きの反響を呼び起こした。<sup>34)</sup>

こうしたヴィルデンプルッフの舞台上での大成功が、シラー賞の受賞につながったことは明らかである。

### III. ヴィルデンプルッフの1896年の受賞をめぐる

ヴィルヘルム 2 世は1898年、執政10周年記念にあたって、祝賀の接見に集まった王立劇場のメンバーに以下のように述べている。

私の見解では、王立劇場は、なによりも、理想主義をわが国民のなかに涵養することを使命とする。…… 王立劇場は君主の道具であり、学校や大学と同様に、次世代を育成し、輝かしいわが祖国ドイツの精神的財産を維持するための仕事に備えさせるという使命を持つということ、私は強く信じ、また決意している。劇場はまた精神と性格の形成、道徳観念の洗練に貢献すべきである。劇場もまた私の武器の一つなのだ。…… 今後も各自がそれぞれのやり方、それぞれの場所で、神を信じ、理想主義の精神に奉仕し、残念ながらすでにかんりのドイツの舞台を退廃させている物質主義や非ドイツのものと戦い続けてくれることを期待するものである。<sup>35)</sup>

ヴィルヘルム 2 世の芸術理解の根底にあるのは「美と調和の法則」<sup>36)</sup>であり、自らの芸術観に反する芸術は彼にとって芸術ではなかった。芸術とは国民に働きかけるものであり、たとえば、労働者階級がづらい労働の後、理想的なもの、美しいものに慰めを見出し、日常の思考範囲から脱却するべきであるとする皇帝の芸術観と、労働者階級の悲惨な日常を描き出す自然主義とは相いれるはずもなかった。<sup>37)</sup> 自然主義を含む現代的な精神との戦いにおいて、

上記のように、劇場は皇帝の武器とならねばならず、当然、シラー賞もそのために利用されることとなった。

1890年、ヴィルヘルム2世即位後、最初のシラー賞授与にあたって、選考は混乱を極めた。まず前回の1887年が受賞作なしで、今回は規定上、2作品の受賞か倍額の賞金が求められていたことも混乱に拍車をかけた。選考委員会のなかでは以前の選考からすでに自然主義作家が強く推されており、今回もズーダーマン (Hermann Sudermann) の『名誉』 („Die Ehre“) が提案された。この作品は、前年末、自由舞台によって上演されて成功を取っていた。また一方ではヴィルデンブルッフの『クヴィツォー兄弟』 („Die Quitzows“) が挙がっていた。ヴィルデンブルッフはこの作品をホーエンツォレルン劇の連作として構想していたこともあり、非常に愛国主義的の色合いが濃く、ヴィルヘルム2世もお気に入りの作品であった。ズーダーマン単独では皇帝の承認はまず得られないと予想した委員会書記で文芸学者のシュミット (Erich Schmidt) は、ヴィルデンブルッフの『クヴィツォー兄弟』と並べて提案することで状況を打開できると考えたようである。しかしシュミットの努力もむなしく、選考委員会のなかで意見の統一を図ることができず、2作品両方を推薦することも、そのうちどちらか単独で提案することも出来なかった。一方文部大臣は『クヴィツォー兄弟』の単独受賞を考えていたのだが、これにはシュミットが頑として反対した。万策尽きた選考委員会は、このうちは規定の変更しかないとも考えたようであるが、結果として、劇作家ではないフォンターネとマイヤーの二人を皇帝に提案したことは前述のとおりである。しかしこの提案も却下され、翌年にずれ込んでようやくフォンターネとグロート (Klaus Groth) に授与が決まるというありさまだった。<sup>38)</sup>

1896年の皇帝によるハウプトマン拒絶は、シラー賞史上最大のスキャンダルといえる。その背景には、『織工達』 („Die Weber“) の上演禁止をめぐる裁判事件などもあり、ヴィルヘルム2世が1895年、ドイツ劇場の皇帝桟敷席を解約させる事態に発展していた。前回は受賞作なしであったため、2作品の受賞が可能となった1896年、選考委員会はヴィルデンブルッフの『ハインリヒとハインリヒ一族』 („Heinrich und Heinrichs Geschlecht“) と、直前にグリルバルツァー賞を受賞したばかりのハウプトマンの童話劇『ハンネレの昇天』を候補作とした。当時の選考委員会のなかでどのような議論があったのか、決議の際の具体的な票数などを残す資料はないが、文部大臣による報告書を見る限り、ヴィルデンブルッフの受賞は当然と見なされ、ひたすらハウプトマンの受賞に腐心している様子がかがえる。<sup>39)</sup>このあたりは、1890年の選考の混乱が教訓になっていたと思われる。また直前にハウプトマンがグリルバルツァー賞を受賞したことも影響していると思われる。しかし今回も皇帝はハウプトマンの受賞を拒み、プフォルテン (Otto von der Pfordten) の祖国劇『1812年』 („1812“) を代わりに推した。しかし委員会が最初の提案を固辞して譲らなかったため、皇帝の命で、

ヴィルデンブルッフのみの受賞で、しかも倍額の賞金が授与されることとなった。ヴィルデンブルッフは、本来ハウプトマンがもらうはずであった分の賞金をシラー財団に寄付した。シュミットは、皇帝のこの処置を受け、書記を辞している。<sup>40)</sup>

『ハインリヒとハインリヒ一族』は、叙任権闘争を取り扱った続き物の悲劇で、序幕である『少年ハインリヒ』 („Kind Heinrich“) と、『国王ハインリヒ』 („König Heinrich“), 『皇帝ハインリヒ』 („Kaiser Heinrich“) から成り、「序幕のついた二晩の悲劇」である。ヴィルデンブルッフはすでに『新戒律』 („Das neue Gebot“) でこの時代を取り上げたことがあったが、今回は、1062年、まだ少年のハインリヒ（後の皇帝ハインリヒ 4世）がケルンへ拉致される場面から始まり、1077年のカノッサの屈辱、1106年の皇帝ハインリヒ 4世の死と1111年の皇帝ハインリヒ 5世の戴冠までという非常に広範な時代を取り扱っている。ヴィルデンブルッフはこの作品を書こうと決意した時、妻に次のように語ったそうである。

みんな始め方が間違っている、ハインリヒを出来事からこしらえているのだ、だが、ハインリヒのあるがままに出来事のほうが起こるのだ。ハインリヒのそういう成長を創作することができるに違いない。<sup>41)</sup>

ハインリヒ 4世を取り上げた作品は多いが、それらは、まず歴史的な出来事ありきで、そこからハインリヒという人物を考える。しかしヴィルデンブルッフは、その逆で、まずハインリヒという一人の人間を描き出そうとした。つまりハインリヒの幼少期から青年期にかけて、さらに老齢期と最期までを描ききることで、その人間像からドイツの歴史を浮かび上がらせようとしたのである。結果として、作品は非常に大部なものとなった。

序幕『少年ハインリヒ』では、10歳の少年ハインリヒをめぐる様々な軋轢が後に続く伏線として示される。皇帝と諸侯、とくにザクセン貴族との敵対関係、さらに皇帝と教皇との対立関係である。家庭内では、ハインリヒと母アグネスとの不仲があり、後にハインリヒが結婚することになる二人の対照的な少女が登場する。少年ハインリヒは、3人の教皇を罷免した父を尊敬し、国王は神をも怖れてはいけないという強い自負心をすでに備えている。それゆえ皇帝ハインリヒ 3世の急死を機に、敵対勢力はハインリヒをケルン大司教に預け、厳格なキリスト教的教育を施すことにする。続く『国王ハインリヒ』は4幕から成る。第1幕、20代の若者となったハインリヒは、ザクセン貴族たちを戦いで打ち負かし、ヴォルムスの市民たちから「市民と農民の友」(42) と称えられる。絶望し、憎しみに支配されたハインリヒは、「彼らが私から奪い取ったもの、信仰に満ちた心、確信に満ちた魂、私の青春は、誰も私に取り戻してくれることはできないのだ！」(58) と心情を吐露する。しかし筋書きの中心となるのは、あくまでもハインリヒと教皇グレゴール（グレゴリウス 7世）との

対立である。ハインリヒがユダヤ人からの寄贈と祝福を受け入れたことに怒った大司教たちに向かって、「私が国王であり、国王の意志がドイツの法なのだ。ユダヤ人であるかキリスト教徒であるかを私は問わない。私が国王であり、国王への忠義がドイツの宗教なのだ」(62)とハインリヒは言い放つ。皇帝としての戴冠を拒む教皇に、ハインリヒは怒りにまかせ、冒瀆的な手紙を送る。第2幕、侮蔑の手紙を受け取ったローマのグレゴールは、ハインリヒを破門する。ローマに押しつけてきたザクセン貴族たちは、新たな王を選ぶためにドイツに来るように教皇に詰め寄る。続く第2場はハインリヒがカノッサへ赴くことを決意する重要な場面である。時はクリスマス、破門になったハインリヒのもとに残ったのは妻ベルタだけであった。彼は、母親が自分を無視して勝手に妻にと決めた敬虔なベルタを、長年突き放してきたが、彼女の深い愛情を知り、初めて自分のそれまでの行いを後悔する。そこにヴォルムスの市民たちが子供たちを連れ、クリスマスの贈物を持って現れる。彼らは、庶民の味方であるハインリヒにこそ自分たちの国王であってほしい、そのためには喜んで戦うと申し出る。それを聞いたハインリヒは、戦いとなって国土を荒らし、人々を死なせないため、破門を解いてもらうべく教皇のところへ行く決心をする。

一時間前であつたら、私にはできなかつただろう。なぜなら私は物乞いとして彼のところへ行つたであらうから — 今、私は再び国王となつた、私の心の中で、今なら私にはできるし、やろうと思う。(115)

つまりハインリヒの決意は、政治的なものではなく、純粹に感情的なものであつた。彼を決意させたのは、妻ベルタの愛であり、また自分を国王と認め、忠誠をささげしてくれる市民たちへの感謝であつた。彼は市民たちに次のように決意を語る。

お前たち、— お前たちが私に人を信じる心を再び与えてくれた。……ドイツの王冠を私は置いていこう、代わりにドイツの嘆きと困窮を抱いて行こう。私は彼の前で身をかめよう、彼は途方もない苦悩の前に身をかめらるだろう。彼は私に向かって腕を広げらるだろう — そしてアルプスから春がやってくるころには、私はお前たちに、国王が国民に負っているもの、平和をもたらすだろう。(116)

第3幕、舞台はカノッサの砦に変わる。ハインリヒは、雪の降るなか、三日三晩、食はず眠らず、門の前に立ち尽くす。最初、門を開こうとしなかつたグレゴールは、アグネスの願いで門を開く。ハインリヒはグレゴールの前で膝を折り、以下のように懺悔する。

私、ドイツ国王ハインリヒは、神の前に自分の罪を認める、なぜなら私は神の代弁者であるあなたに、冒瀆するような罵詈雑言を浴びせたからである。人に対して罪を犯したことを認める、なぜなら最も忠実な心に忘恩で報いたから、自分の妻に対して不実であったからである — 自然に対して罪を犯したことを認める、なぜなら自分の母親に敵対したからである — 私は三度、大罪をしょい込んだ — 三日三晩あなたは私を後悔のなかに立たせた — (彼は首を垂れ) 私は認める — (言葉を詰まらせながら) あなたが私に正当な贖罪を命じたことを。(136)

教皇はハインリヒのこの言葉に衝撃を受け、「これでこそ国王だ！」(136)と感動の涙を流し、破門を解くのだった。しかし、この和解は一瞬のことであった。居合わせたザクセン諸侯からアウグスブルクで帝国会議が開かれることを聞き、ハインリヒはもう一度教皇にひざまずき、悲惨な市民戦争を避けるため、ザクセン諸侯に加担しないよう頼むが聞き入れられず、再び神を信じることをやめてしまう。第4幕、ハインリヒの軍がローマに迫っている。ハインリヒ自身が扮装して、グレゴールの元を訪れ、自分に皇帝の冠を授けるよう要求する。ハインリヒが望んでいるのは、他の誰でもない、グレゴールからの戴冠であった。息子が母にするように、自分の前でひざまずくようにいうグレゴールに、ハインリヒは次のように答える。

あなたにひざまずいても何もならないことを私は知っている。かつてひざまずいたときに、私の魂の中の神は死んでしまった。私がかつてあなたの中に求めた、あなたが私から奪い取ってしまった神を返してくれ。(156)

二人の話し合いは決裂し、ドイツ軍が教会の中にまで侵攻してくる。新しい教皇をたたえる声が響く中、グレゴールは亡くなる。「それでも未来は私のものだ！」(163)という言葉を残して。これが続く第二部への伏線となる。

『皇帝ハインリヒ』の第1幕、教皇グレゴールが亡くなって12年後、トリエンティーナの皇帝ハインリヒ4世の城。教皇の最期の言葉のように、ハインリヒは教皇位をめぐる長い戦いに疲れ、グレゴール一派の残党に敗北しようとしていた。そのなか皇帝と二人の息子たちとの対立が露わになる。皇帝の二番目の妻プレクセデイスを、息子たちは母と認めようとしない。長男のドイツ王コンラートは、母親ベルタ、祖母アグネス同様、信仰にのみ拠り所を求める。ゆえに彼は教皇からの破門に苦しみ、十字軍に加わろうとする。神にすがろうとするコンラートに、父ハインリヒはドイツ国王としての使命を説くが、理解されない。コンラートは王冠を権力に飢えた弟ハインリヒに譲り、十字軍に旅立つ。その際、彼は弟に、何

があっても父を守るという誓いを立てさせる。第2幕、舞台は聖霊降臨祭の日のレーゲンスブルク、皇帝になるという野望を抱くハインリヒにとって、父を守るという誓いは大きな障害であったが、大司教が教皇の名でその誓いを解く。皇帝が自分たちよりも市民たちを大切にすることに不満を抱く貴族たちは、国王ハインリヒの側につく。第3幕、ライン河畔の女子修道院、嵐の夜、瀕死の皇帝ハインリヒが運び込まれる。死の間際、彼はライン川の水と岸辺の土を持って来させ、以下の言葉を残す。

ハインリヒはドイツであった — ドイツがハインリヒなのだ — 永遠が結びつける — 春が峡谷を超えて訪れると少年ハインリヒは、緑の森の中に飛び出していく — ライン地方の山にブドウがたわわに実るなら — そこに燃え立つのはハインリヒの魂なのだ。 — 私の髪は白く、身体は疲れたが、心はまだ若く、愛することができる。…… ドイツよ、若くあり続けよ！ 思慮分別に富んだ愚かさに満ちて — ドイツよ — 若くあり続けよ。  
(286f.)

追ってきた国王ハインリヒは、父の遺体にすがる。彼は早速諸侯に服従を要求し、亡き父の破門を解くべくローマに向けて旅立つ。第4幕、ローマの教皇パシャリス（パスカリス2世）に、自分を皇帝にするよう迫るが、拒否されたため、武力に訴える。教皇を守ろうとするローマの人々に、ドイツ兵たちは「カノッサの復讐を！」(314)を合言葉に攻め込むのだった。第5幕、皇帝となったハインリヒ5世は、破門を解かれた父ハインリヒ4世をシュパイアーの大聖堂に葬る。そこに修道士に身をやつしたコンラートが現れ、「お前がこの世界から奪い取った魂を返せ」(322)と弟に迫る。民衆は亡きハインリヒを聖人と称え、皇帝ハインリヒは、自分ではなく父こそがドイツ人の王であったことを悟るのだった。この結末のシーンには当時のドイツ帝国の時局が織り込まれている。つまり、ハインリヒ4世は亡くなったヴィルヘルム1世を、即位したばかりのハインリヒ5世はヴィルヘルム2世を表すことは容易に読み取れる。

『序幕』と『国王ハインリヒ』は、1896年1月22日にベルリン劇場で初演され、大成功を収め、その公演回数は続く5か月間で100回を超えた。ここで注目すべきは、その初演の前日にあたる1月21日、ハウプトマンの歴史劇『フローリアン・ガイアー』(„Florian Geyer“)がドイツ劇場でやはり初演され、期待された結果を得られなかったことである。当時の批評は、この両者の対決をこぞって書き立てた。とりわけ反ハウプトマンの陣営にとっては、『ハインリヒ』が大成功を収めたことで、ここぞとばかりにハウプトマンだけでなく自然主義文学を酷評した。<sup>42)</sup>ヴィルデンブルッフ自身、初演の大成功の陶醉感冷めやらぬ様子で、以下のように手紙(1896年1月27日付け)に記している。

私は生涯で2度目の夢のような出来事を体験しました。当時、ハーロルトとカロリング王朝人が世に出たときに起こったすべてのことが、また起こっています。しかも、より強力に、より偉大に、より真剣に。当時は驚きとしてきたものが、今回は待ち焦がれたものとして現れました。当時は予期せぬ誕生を体験したのに対して、今回は死者が復活するのを見るかのようなようです。それらは奇跡のように作用してきます。私はこの作品に多くを望んでいました — それが成し遂げたことを私は予期も、予想もしていませんでした。しかし大切なのは、私という人間でもなければ、個人的な成功でもありません。まさに決定されようとしていたのは、何かもっと重大なこと、誰がドイツの劇芸術を支配すべきなのか、古い、偉大な、純粋にドイツ的な魂なのか、それとも輸入された、異質の、非ドイツ的な魂なのか、という問題なのです。<sup>43)</sup>

興味深いのは、初回のシラー賞受賞につながった『ハーロルト』や『カロリング王朝人』の人気と比較して述べていることである。同じような視点から Hanstein もヴィルデンブルッフと自然主義を対置して考察しているので、以下に引用する。

さて、この作品の途方もない効果が、『フローリアン・ガイアー』の完全な不評と重なることで、時代が何を本当に求めているのかを、もう一度示すことになった。人は、永遠の臆病者、意気地なし、に心底うんざりしていた — たとえそれらが偉大な芸術で描かれていたとしても。多くの人は、英雄を、力強い人物を求めていた — たとえその姿が画家の多くのミスタッチを示していても。そうした要求をもって文学の革命は始まった — 一部の隙もない自然主義は要求を満たすことができなかった。それゆえにヴィルデンブルッフが、その運動の始まりと同様、その終わりに、相変わらず勝利を手にし、倒れることなく立っている、あらゆる欠点にもかかわらず — なぜなら、彼は少なくとも力と情熱を持っているからだ。<sup>44)</sup>

続く第二部『皇帝ハインリヒ』は、シラー賞授与の翌月、12月2日に第一部と同じくベルリン劇場で上演され、同様の成功を取めた。20世紀に入っても、『ハインリヒとハインリヒ一族』は上演され、ヴィルデンブルッフの全作品のなかで最も成功した作品となった。H. Grimm は、「この作品はドイツ戯曲の皇帝である。シェイクスピア作品がイギリス戯曲の王であるように。我々はそのようなものをこれまで持っていなかった」<sup>45)</sup>と非常に高く評価している。一方で、ハイゼの冷ややかな表現を借りれば、「ハインリヒとハインリヒ一族がシラー賞を受賞したことは、まったく問題ない。100回を超える公演は、文学的な面でどれほど問題のある作品であっても、尊敬すべき舞台上の活力である」<sup>46)</sup>となる。

しかし当のヴィルデンブルッフは2度目のシラー賞が授与されるとは思っていなかったようである。『クヴィツォー兄弟』以降、皇帝とヴィルデンブルッフとの関係が悪化していたからである。『クヴィツォー兄弟』に続く2作目のホーエンツォレルン劇である『將軍』 („Der Generalfeldoberst“) が、上演目前の1889年、皇帝の命により上演を差し止められたのだ。ヴィルデンブルッフは皇帝に長い直訴状を書き、また宰相ビスマルクに会って支援を要請したが、結局、明確な理由が示されぬまま、作品はプロイセンの王立劇場とベルリンのすべての劇場で上演禁止となった。プロイセンの歴史をホーエンツォレルン家とのかかわりのなかで描こうという計画はついでに壊れてしまった。これをきっかけにヴィルデンブルッフの皇帝への不信感は決定的なものになっていった。<sup>47)</sup> さらに追い打ちをかけるように、1895年、王立劇場で公演予定の短い民衆劇『ヘナースドルフの少年』 („Der Junge von Hennersdorf“) がやはり皇帝によって上演禁止になり、これは作者にとって非常に不本意な変更の後、別の劇場で上演はされたものの、皇帝、さらには王立劇場への憤りは決定的なものとなった。ヴィルデンブルッフがハイน์リヒの連作をベルリン劇場に持ち込んだのには、こうした事情もあったのである。したがって、シラー賞受賞によって皇帝と自然主義との対立の矢面に立たされたヴィルデンブルッフの困惑は大きく、皇帝の命で倍増された分の賞金を即刻、シラー財団に寄付したのはその表れといえる。<sup>48)</sup>

## おわりに

1896年のシラー賞は、反自然主義のヴィルヘルム2世によるハウプトマン拒否が大きなスキャンダルとなった。その結果、あたかも皇帝がハウプトマンを拒否し、その代わりにヴィルデンブルッフにシラー賞を与えたかのような印象を与えることとなった。しかしヴィルヘルム2世の干渉は、ヴィルデンブルッフに関しては、賞金を倍増したことのみであり、これは、前回のシラー賞が受賞作なしであったため、シラー賞の規定にのっとった行為であった。

## 注

テキストは Wildenbruch, Ernst von: Gesammelte Werke in 16 Bänden. Hrsg. von Berthold Litzmann. Berlin (Grotesche) 1911-1924. (以下略 GW) を使用。『ハーロルト』の引用は第7巻から、『ハイน์リヒとハイน์リヒ一族』の引用は第11巻から、すべて本文中、引用後の括弧内に頁数のみ記す。

- 1) シラー賞に関しては、主に以下を参照した。Sowa, Wolfgang: Der Staat und das Drama. Der Preußische Schillerpreis 1859-1918. Eine Untersuchung zum literarischen Leben im Königreich

- Preußen und im deutschen Kaiserreich. Frankfurt a.M. u.a. 1988.
- 2) Ebd., S.282.
  - 3) グリルパルツァー賞は Franz Grillparzer (1791-1872) の遺産を受け継いだ婚約者 Katharina Fröhlich によって1872年に創設された文学賞で、ドイツの有名な劇場で上演され、かつ他賞をまだ受賞していない優れた劇作品に3年ごとに授与された。Vgl. Sprengel, Peter: Geschichte der deutschsprachigen Literatur 1870-1900. Von der Reichsgründung bis zur Jahrhundertwende. München 1998, S.143f. パウエルンフェルト賞は、オーストリアの作家 Eduard von Bauernfeld (1802-1890) の遺言によって1894年に設けられた文学賞で、優れた文学作品（とくに劇作品）に授与された。これらの賞の比較は、Vgl. Sowa:a.a.O., S.64ff.
  - 4) Ebd., S.283.
  - 5) Vgl. Luserke-Jaqui, Matthias (Hrsg.): Schiller-Handbuch: Leben-Werk-Wirkung. Stuttgart 2011, S.563.
  - 6) Sowa: a.a.O., S.346.
  - 7) Ebd.
  - 8) ヴィルヘルムは、1858年からプロイセン摂政、1861年からプロイセン王、1871年から1888年まで初代ドイツ皇帝の地位にあった。
  - 9) Vgl. Ebd., S.52.
  - 10) Vgl. Kiefer, Sascha: Dramatik der Gründerzeit—Deutsches Drama und Theater 1870-1890. St. Ingbert 1977, S.117.
  - 11) Vgl. Stather, Martin: Die Kunstpolitik Wilhelms II. Konstanz 1994, S.63f.
  - 12) 1905年の受賞者は、Gerhart Hauptmann と弟の Carl Hauptmann, Richard Beer-Hofmann であった。3人への授与には反対の声も多かった。さらに1908年、国民シラー賞は、本家のシラー賞と全く同じ Karl Schönherr の „Die Erde“ と Ernst Hardt の „Tantris der Narr“ に授与され、世間を驚かせた。
  - 13) Sowa: a.a.O., S.446.
  - 14) Vgl. Ebd., S.199.
  - 15) Vgl. GW Bd.7, S.IX.
  - 16) Vgl. Ebd., S.X.
  - 17) Hanstein, Adalbert von: Das jüngste Deutschland. Zwei Jahrzehnte miterlebter Literaturgeschichte. Leipzig 1901, S.23.
  - 18) Fontane, Theodor: Tage- und Reisetagebücher. 3 Bde. (Grosse Brandenburgischer Ausgabe), hier Bd.2. Tagebücher 1866-1882/1884-1898. Hrsg. von Gotthard Erler. 2 Aufl. Berlin 1995, S.169.
  - 19) Fontane: Causerien über Theater. Hrsg. von Edgar Groß. 3 Bde. (Nymphenburger Fontane Ausgabe, Bd. XXII/1-3), hier Bd.2. München 1964, S.146.
  - 20) Ebd.
  - 21) Ebd., S.152.
  - 22) Ebd.
  - 23) Ebd.
  - 24) Sowa: a.a.O., S.454.
  - 25) Vgl. GW Bd.7, S.XIIff.

- 26) Sowa: a.a.O., S.454.
- 27) Ebd.
- 28) Vgl. Ebd., S.203.
- 29) Ebd., S.453.
- 30) Ebd., S.454.
- 31) Ebd.
- 32) Ebd.
- 33) Vgl. Kiefer: a.a.O., S.161.
- 34) GW Bd.7, S.VI.
- 35) Penzler, Johannes (Hrsg.): Die Reden Kaiser Wilhelms II. 4 Bde. Leipzig o.J., hier Bd.2, S.98f.
- 36) Penzler: a.a.O. Bd.3, S.60.
- 37) Vgl. Ebd., S.61.
- 38) 当時の反響に関しては, Vgl. Hanstein: a.a.O., S.267ff.
- 39) Vgl. Sowa: a.a.O., S.253f.
- 40) シュミットは後にグリルパルツァー賞の選考委員となり, ハウプトマンの受賞に貢献した。  
Vgl. Sprengel: a.a.O., S.143.
- 41) Litzmann, Berthold: Ernst von Wildenbruch. 2 Bde. Berlin 1913–1916, hier Bd.2, S.156.
- 42) Vgl. Leutert, Torsten: Ernst von Wildenbruchs historische Dramen. Frankfurt a.M. 2004, S.159ff.
- 43) Ebd., S.157f.
- 44) Hanstein: a.a.O., S.291.
- 45) Litzmann: a.a.O., S.162.
- 46) Sowa: a.a.O., S.259.
- 47) 詳しくは拙稿「ヴィルデンプルッフのホーエンツォレルン劇について」(愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第36号, 2017) 参照。
- 48) Vgl. Litzmann: a.a.O., S.183.